

経典研究の方法

小谷 信 千代

最近、経典研究の方法を考察した幾つかの論文を読む機会があった。その中で、筆者には下田正弘氏の『涅槃

経の研究』と勝呂信静氏の『法華経の成立と思想』がとりわけ興味深く思われた。そこでいまは両書に基づいて

「経典の成立過程を考察する方法」について考えてみたい。それに先立って、下田氏の著書には経典研究全般に

関する方法論や研究史の検討がなされているので、まず氏の研究に基づいて「経典研究の方法」から考察を始めた

たい。

ここに取り上げる下田氏の『涅槃経の研究』は経典研究に関する多くの方法論をその長所と短所を上げて解説し、自己の方法論を示し、その上で『涅槃経』の形成過程を説明するという作業を通して自らそれを実践して見

せるといふ、甚だ意欲的な書物である。その内容を各章の題名によって示せば次のようである。

序章 大乘経典研究の諸問題

第一章 大乘涅槃経前史

第二章 大乘涅槃経の形成史

第三章 大乘涅槃経の思想の変遷

第四章 大乘涅槃経の社会背景の変遷

第五章 結論

ここでは、紙面の都合上、経典研究の研究史を扱う序章と、その方法論を述べた第一章、および著者の方法論を実践してみせた後半の三章の中から第二章を取り上げることにする。

まず序章では、従来の大乗経典研究を、大乘仏教の教

団起源にかかわるもの、思想研究にかかわるもの、文献形成史に関するもの、文献外資料の扱いに関するもの、大乘・小乗の区別立てへの議論に関するもの、仏教史解釈のための類型論にかかわるものに分類し、そのそれぞれに関する代表的な研究が検討される。著者は多くの研究書の中から当該分野を代表すると思われるものを幾つか選び出し、その要旨を簡潔に紹介する。それによってわれわれは大乘經典の研究史をいながらにして目にすることができる。そして著者は涅槃經の研究には經典を一挙に解読せしめるような「賢明な視点の発見」などはないと言う(ii)。実に多くのこれまでの研究成果がその本質を的確に把握されて著者の考察の俎上に載せられている。それらの論文の中で「大乘仏教の教団起源にかかわるもの」と「文献形成史に関するもの」に分類された研究の項目が著者の涅槃經研究に最も大きな影響を与えているように思われる。

一、經典研究と大乘仏教の起源

周知のようにわが国では、大乘仏教については村上專精らの「大乘非仏説論」が登場して以来、様々に議論がなされてきた。その議論はやがて「大乘の起源」を問う

という方向に鋒先を転じ、小乗の一部派である大衆部を起源とするという前田慧雲らの説を経て、平川彰『初期大乘仏教の研究』(1968)によって新たな展開を迎えた。平川説では、大乘教団は、部派とはまったく異なった在家の流れに源流を發し、仏塔を起源として興ったとされる。平川説にはその当初において反論があったものの、わが国ではおおむね支持され、近年では定説化していたと言つてよい。

他方、欧米では大衆部を中心とした部派に起源を有するという理解がずつと主流をなしている。その主たる原因の一つを、著者はバローが行なった律藏中の仏塔に関する記述の研究(1962)に求めている。そして欧米で仏塔を文献的に裏付けようとするときには、仏塔が部派仏教にとつて重要な意味を持つとしたバローの研究に基づくのが通常であるのに対して、わが国では仏塔供養を大乘經典に固有の現象とみなしたところに両者の理解の違いが生じたと述べる(p. 13)。

バローの研究を踏まえて平川「仏塔教団起源説」を批判したのはシヨープン(1975)である。彼の平川説批判はわれわれに大きな衝撃を与えた。彼はその後の論文(1979)で、大乘 mahāyāna の語は碑文においては四世

紀以降にしか現われず、ナーガールジュナコンダや西北インドにおいては大乘のものと見られる碑文は存在せず、それゆえ四世紀まで大乘は独立した教団を形成することなしに部派の中で共存し、その後、教団として自立し始めたことと結論づけている (P. 116)。大乘が部派の内部で成長したことをもつと早い時期に指摘したのはプシルスキイであった (1925, 28)。彼は各部派内部に大乘の運動を發展させていった可能性のあることを示唆し、「説一切有部の大乘」「正量部の大乘」「法蔵部の大乘」といった存在を想定する必要性を示したのであった (p. 11)。

著者は仏教文献を研究する態度を大きく二つに分けて、文献の内容に歴史的諸段階を想定し、その段階の解明を通して当該の思想なり、社会背景なりを明かそうとする態度と、歴史的諸段階を想定することなく、与えられた文献をまとまりのある全体として捉え、むしろその統一的な意味解釈を図ろうとする態度とに分ける。そしてそれぞれの態度で行なわれる研究を挙げて説明している。その中、歴史的諸段階を想定して行なわれる研究において共通な記述がより古いとみなされることに關して著者は、シヨーパーン (1905) がインド仏教の歴史文献が後世に書き換えられた可能性を考慮する必要性を示

唆していること、さらにはゴンブリッチ (1930) が伝承は矛盾のない方向に訂正されながら受け継がれていくと述べていることを紹介して、異本に共通な記述をより古いものとする暗黙の前提に注意を促している (p. 20)。

著者の經典研究の方法論に大きな影響を与えたものは以上のような研究であったと思われるが、それ以外にもこれまであまり注目されなかつた研究で著者の大乘經典研究に強い影響を与えたと思われる幾つかの研究が「新たな仏教史への可能性」という見出しの下に取り上げられている。

そこには伝統部派仏教と大乘仏教の連続性を明かす研究が紹介されている。その中に、阿含・ニカーヤから大乘經典へという經典制作に連続性が認められるというマックイーンの説 (1981, 83) が挙げられている。マックイーンは厳密な意味でブツダ自身のことばでないものが、經典として認められた基準を次のように示している。

- ① 弟子が説いたものを後に「仏」が承認したもの
- ② 説法する前に「仏」が承認して説かせたもの
- ③ その説法に「靈感 *pari-hattha*」が認められるもの

③の場合についてマックイーンは、ニカーヤ中に「世尊よ、私に靈感が生じました」と告げ、それを世尊が許

可する内容となつてゐる経が十二例あることを挙げ、それゆゑ「よく語られたのはブツダのことばである」というニカーヤの記述が示すように仏説 *buddhavacana* は必ずしも「歴史的なブツダのことば」である必要はない、と言う。マックイーンはそこにおいて『八千頌般若経』を分析して、この経でスプーティがブツダに代わつて法を説く手順が、ニカーヤに見られる *paṭiśāra* の構造をとつており、さらに最後に「現前するブツダ」の承認を得るといふ、ニカーヤとまったく同じ構造をとつてゐることを指摘する。この指摘に基づいて著者は、『八千頌般若経』に登場するブツダは歴史的ブツダではないが、經典自身もそれを装うように経を作つてはいない。ここにはブツダ観の大きな変革が存在していると述べる。また、仏語のイメージがすっかり変わつてしまつており、法師から伝えられる、真実を伝えようとする生きたことばが仏語なのであるとも言う (p. 46)。

上記のような過去の經典研究の方法論を踏まえた上で著者は自己の研究態度を四点に総括してほゞ次のように説明する (pp. 49-55)。

① 大乘と伝統部派との関係について

阿含・ニカーヤと大乘經典とは、たとえば共に

paṭiśāra 構造を取るものが存在する事実が示すごとく一致する。また平川説が教団の依り所として想定する仏塔と僧院という対立は、部派単位での大乘と小乘 (伝統部派) という対立ではなく、同一部派内部に抱えた異なつた類型の仏教として捉えるべきである。

② 社会背景研究と思想研究の接点について

学会には、同一經典を対象として、平川博士によつて提唱された「教団史的観点から經典を読む」という新たな立場で解明された教団研究の成果と、論書によつて切り取られた側面から描かれたり、従来の宗学の範囲を超えない程度にまとめられた思想研究とが、互いに連関を持ち得ないまままで横溢する、という現状が存在する。しかし經典の社会背景と思想とは密接不可分な関係にあることにもつと注意を払うべきである。

③ 經典における思想研究の方法について

②と③の問題は「ただ一つのことばを、文献内在的に読み取る」という態度に徹することによつて解決が図られる。この姿勢に徹するならば仏教の教団史的解題と思想的解題とはばらばらになりようがないし、經典における思想研究は注釈や論書による偏つた制限を受けずに行なうことができる。

④ 文献形成史の方法論については、著者が「具体例を離れた簡略なまとめは意味をなさない」と述べているように第二章以下に具体的な形で示される。

二、初期経典における涅槃經の形成史

以上のような研究態度を自覚的に維持しつつ涅槃經の形成史を説明するという仕方が終始一貫して取られているのが本書の特長をなしている。第一章では伝統部派の伝承した非大乘系の涅槃經の問題が検討される。著者は、初期経典においては涅槃という話題を取り上げる経典が極めて少数である点にその特異性があることに注目する。そしてそれを経典の持つ本質的な性格が反映したものと考えている。著者は阿含・ニカーヤ・律藏中にブツダの入滅を主題として扱った文献として二十二を挙げる。バロー(1976)はかつてこれらの文献の中から涅槃經の原初形態を辿ろうとしたことがあった。著者はバローの研究に基づいて涅槃經の中核になった部分を捜し、それを「クシナガリーにおけるブツダの涅槃」を物語る部分に求める。その中でもバローは「クシナガリーでの最後の時」の部分の中核であり、その後すぐに「葬儀、舍利供養」の部分が付加えられたものと考えた。著者はブツ

ダの「入滅の事実」のみを記したものはなく、必ずブツダ滅「後」の模様の記述が絡んでいる事実を理由に、バローの考えに疑念を抱いた。

経典の中核を求めるに際して著者は「経典制作の意図」を尋ねるといふ方法を取る。「歴史的事実は教義の保存をはじめとする何らかの宗教的関心に支えられ、それに付随して残された二次的な成果と考えたほうがよい」と思ったからである。「ブツダの入滅」を話題にした経典作者の関心は何であったか。あらゆる経典や律は、ブツダによって真理としての資格を得ていくものである。にもかかわらずブツダの涅槃を語るのは、その真理の担い手であるブツダが最後を迎える場面を設定することだから、仏教の源泉が途絶えてしまう場面を作り上げようとすることになる。それをあえてするには通常の経典制作以上の格別の動機が要求される。

著者によれば、涅槃經制作の意図は、入滅の解釈を、「仏の入定」という観点と、「仏身・舍利に関する奇跡」という二つの観点によってまとめあげる点に存していたとされる。前者の観点による解釈とは、ブツダの「死」を「禪定」といふ観点で捉え直し、涅槃をブツダの存在の消滅ではなく禪定による「涅槃界」への悟入と解した

とするのである。そうすれば法を保証するブツダが禪定に常に存在することになるので、仏滅後に制作され続ける聖典の根拠が保証されることになる。他方、後者の観点による涅槃の解釈によれば、経の「ブツダの遺体を包んだ最上と最下の布が焼け残った」ということばはブツダの滅後の遺体に関する奇跡を述べたものと解される。つまりこの箇所での涅槃経の意図は、ブツダの入滅という場面を「仏身・仏舍利に関する奇跡を認める場面」に変えるという点に存するのである。いずれの観点からにせよ、涅槃経はブツダの入滅という事実を語ることによつて、かえつて「仏身の永遠性」というテーマに踏み込んだのである。以下、著者は、阿含・ニカーヤ・『ブツダチャリタ』・碑文・律における遺骨崇拜の記述を通して、遺骨（仏塔）崇拜がいかにして涅槃経の核心となる「ブツダの存続」という主題と結びつくに至ったかを追及していく。結論のみを示せば、著者はそれらが結びつく起源を律中に記されるブツダの髪や爪などを祀った「聖遺物 *stupa cadavre*」としてのストゥーパに求めている (p. 101)。著者はまた、仏塔崇拜がすでに部派において存在しており、全仏教の前提となっていたことを指摘している (p. 133)。これらの指摘は、平川博士の

大乘仏教「仏塔教団起源説」を覆すものとして興味深い
が、ここではその問題には立ち入らない。いまはむしろ
本書におけるより重要と思われる指摘を紹介しておき
たい。

第一章の結びにおいて仏塔信仰と大乘經典の關係について考察しているが、その中に極めて重要な指摘がなされている。そこにおいて、著者は二つのブツダ観に触れ、ブツダの存在は、大きく分けて、形象・アイコンに託されるか、あるいは形象を超えた「ことば」に託されるか、に分かれていったと述べる。そして、後者の流れはニカーヤを中心とする初期仏教經典となつて現われ、前者の流れは仏塔や仏像に象徴される (p. 143-145) の前者・後者という指示語は逆になっている。このうち、阿含・ニカーヤという形にまとまつていく後者の伝承の大部分は、比較的早くに閉ざしてしまつた可能性が高い。しかし、その中の一部、たとえば *Pratīka* を尊重する流れの者たちは、前者、すなわちアイコン、仏塔としてのブツダの表現から示唆を得ながら、經典制作活動を続けていった。マックイーンの研究から理解されるように、この流れが大乘經典制作に結びついている可能性が高い、と言ふ。

この指摘は序章で紹介されたマックイーンの「ブツダのことばの基準」と考え合わすと色々なことが想像されて極めて興味深い。例えば、われわれは次のようにも想像することができる。すなわち、原始涅槃經においては涅槃したブツダの存在は禪定に入った者であるか、あるいは舍利として存在する者と解された。それはいづれも何らか物質的な身体として存在する者と考えられていた。それに対して或る人々のもとにおいては、涅槃したブツダは形象を超えた「ことば」に託され、prajñāの流れと合流し、やがて大乘涅槃經を生み出していった。そのようにして合流したものを著者は、『般若經』や『法華經』にも見られるような、儀礼的事実としての仏塔信仰に飽き足りず、「経典」という形で表される新しい真理のすがたを模索しようとする流れ、と表現している (p. 147)。それではそれらはどのようにして合流したのであるか。著者はこの問題に直接的には答えてくれない。しかしわれわれはこの問題をも著者の提供する資料をもとに色々と考えていくことができる。

例えばそれには「縁起を見る者は法を見る。法を見る者は縁起を見る」と説かれ、「法を見る者はブツダを見る。ブツダを見る者は法を見る」と説かれる阿含・二

カーヤに反映しているブツダ観の存在を考えることができるかもしれない。著者も指摘するように、大乘の『稲稈經』においても縁起を見る者は「無上の法の身体としてブツダを見る」と説かれている。この経典はパーリ聖典と多くの平行箇所を有することから成立が非常に古く、紀元前二百年頃と見る学者もあるほどである (『大乘経典解説事典』)。それはまた二世紀のものとも認められるカロシユティ碑文の中にブツダの遺骨と「縁起の法」を収める記録が存在する (p. 147) ことも関係するであろう。著者は遺骨を縁起頌と等置する塔を、その出土時代から『般若經』等より後に成立したものと考えている (p. 149)。しかし、塔の建築された年代は遅いとしても、『稲稈經』やカロシユティ碑文の年代の古さを考慮すれば、ブツダの遺骨を縁起頌と等置する思想の成立を果たして『般若經』等より後とすべきかどうか、一考の余地があるのではなからうか。これは大乘の起源を解明する重要な手掛かりとなる問題でもあると思われる。著者にさらに調査検討を求めたい点である。

三、大乘涅槃經の形成史

さて、大乘涅槃經の形成史の考察は第二章においてな

される。考察の対象とされるのはインド成立であることが確認される部分に限られている。したがって資料としては、現存サンスクリット断片すべてと、法顕訳『大般泥洹経』と、それに相応する曇無讖訳『大般涅槃経』前十卷及びチベット訳とが用いられる。

大乘涅槃経の形成に関して階層設定を行なうに際して著者は、第二章では本経の抱える異質性に考察の目を向け、第三章、第四章でその異質性がいかなる意味で連続を保っているかという同質性に目を向けるように努めることを、基本的な態度とすると言う(116)。著者はかつて横超慧日を立てた「原型の涅槃経」という仮説(108)を単に文献の記述・体裁上の観点からなされたものとして批判し、経典の内容研究、異訳テキストの比較研究からそれぞれ帰納され、理論的な前提として要請される「原始大乘涅槃経」を想定しなければならぬと言う。つまり、一つのテキストに様々な内部矛盾があり、異訳テキストに差異があることが説明できるような、「原始大乘涅槃経」を想定しなければならぬと言っている。著者によれば法顕訳の「序品第一」「大身菩薩品第二」「長者純陀品第三」「哀歎品第四」「金剛身品第六」が「原始大乘涅槃経」に相当する層(第一類)をな

し、「長寿品第五」および「受持品第七」以降の全十二品が後に発展形成されあるいは移入形成された層(第二类)をなすものと想定される。そして以下、一つのテキスト内の矛盾及び異訳間の矛盾が、これら二つの層の間に見られる差異とどのように関係しているかが考察される。

それらの矛盾がまず、社会背景の変化という側面から涅槃経の支持母体が「法師」から「菩薩」に代わったことによってもたらされたものであることが説明される。涅槃経では世尊の対告衆として登場しこの経を支持する者とされるのは、「比丘」(大乘と部派とを問わず乞食生活を送る宗教者全体に幅広く使用された)を除けば、「法師」と「菩薩」である。ところが「金剛身品第六」を境にして「法師」は殆ど登場しなくなり、代わって「菩薩」が護法者として登場するようになる。しかも「金剛身品」以前の諸品においては法師が、国王・大臣・長者らと親しく「香・油・幡・華」等を供養し、利養と名誉とを拒否せず、眷属を喜ばせることが推奨されているが、それ以降の諸品ではそれらの行為を菩薩の行なうことが否定されている。「金剛身品」の以前と以降に見られるこのような変化は、涅槃経を支持する者たち

の社会背景が変化したこと、つまり彼らの「出家化」「教団化」の進んだことを反映するものであると著者は言う。

次に思想内容の相違という側面から「仏身常住思想」から「如来藏思想」へと思想が変化したことによるものであることが説明される。例えば、涅槃経が常・楽・我・淨を説くことはよく知られているが、著者はその常楽我淨説が二種に分かれることを指摘する。「原始大乘涅槃経」に属すると考えられる「哀歎品」ではそれらはそれぞれ法身・涅槃・仏・法に配当されているが、後期のものと考えられる「四倒品第十二」や「如来性品第十三」ではそれらはすべて如来と如来藏に配当されており、前者と後者とは「仏身常住思想」から「如来藏思想」への変化が見られると言う。

このように二つの側面から涅槃経に二つの層のあることが、同一テキスト内に見られる種々の矛盾、異訳間に現われる齟齬を詳細に検討することを通して論証される。その精緻な論証作業の中に上記の著者の研究方法が自覚的に実践されており、われわれは經典研究の方法論がいかなるものであるかを如実に知ることができる。

前述したように、著者は、大乘涅槃経の形成過程を考

察するに際して、第二章では異質性に考察の目を向け、第三章、第四章では同質性に目を向けるように努めることを基本的な態度として考察することによって、勝呂氏の目指したものと親和性の強い結果に到達した旨を記している (p. 10)。しかし筆者には、両氏の達成された成果は少なからず異質な印象を与える。勝呂氏は、法華經全体を一つのグループによって編纂されたものであると考へ、そうである以上「編纂者たちは、当然執筆に先立って、經全体の構想について的一致した見取り図や目論見を持つていたと考へねばならない」と述べる (p. 5)。したがって氏の考察は常に經典の階層の同質性に向けられる。他方、下田氏は、涅槃経の第一類と第二類の制作者 (トレーガー) はそれぞれ別であり、前者は法師であるが後者では菩薩に代わっていると言う。氏はその交代を、遊行者であった法師が徐々に教団内部にところを得て、「林住型から僧院型へ変化」したことに合致するものと述べる (p. 30-33)。このように、經典の階層の同質性を考察しようと努めた第三章、第四章においても、下田氏の視線はむしろその異質性の方に向かっているように思われる。しかしそれが氏の考察を興味深いものとしている長所であるように筆者には思われる。

四、法華經の成立史

ここでわれわれは両氏の見解の違いを明らかにするために、勝呂氏の『法華經の成立と思想』に目を転じてみよう。『法華經』はその諸品の間に説相を異にした場面が認められるため、その異質性に着目して經を分析的に見ると、あたかも、独立性の強い諸部分を接合して全体が構成されているという印象を与える。しかし先に述べたように、「經典の編纂者たちは、經全体の構想についての一致した見取り図や目論見を持っていたと考えねばならない」とするのが氏の主張せんとするところである。つまり氏は、継続的に行なわれた一連の編纂作業が終了したときには、法華經は提婆品を除く二十七品の形態をとっていたと考えるのである(p. 65)。説相の相違は、複数の作者が複数の読者層を意識して作成したという事情の反映したものである(p. 51)。したがって、連接する諸品の間に説相の変化が大きく、所説が直接に結びつきがたく思われるところがある場合には、そこに隠された論理を見出して顕在化する必要がある(p. 197)。

例えばこれまで多くの研究者が、書写行への言及の有無やストゥパ崇拜とチャイティヤ崇拜の相違などに基づ

いて、それらが現われる諸品の成立年代が推移したものと想定してきたのに対して氏は次のように言う。すなわち「仏在世の時代は經典の書写は行なわれていなかったから、それを場面とする第一類には書写の言葉はあらわれていない。(中略)これに対して第二類においては、滅後の經典の流通が主題であって、とくにチャイティヤへの奉安が問題として取りあげられているから、それとの関係上、必然的に書写行が強調されるに至ったのである。書写行の有無の相違、ストゥパ崇拜とチャイティヤ崇拜の相違は、時代による変化ではなくて、主題の転換に伴う『法華經』作者の関心事の推移に外ならないと考えるのである。(中略)それは経作者の関心事が、在世から滅後へ変化・推移したこと「を示すの(筆者加筆)」である(p. 149)」と。第一類とは序品以下の九品と隨喜品を指し、第二類とは提婆品を除く法師品以下の十品を指す。

氏はまた、第一類から第二類に至る『法華經』の叙述構成は、声聞が菩薩に転化する過程を描いたものであり、その叙述構成そのものが廻小向大(廻心)を寓意したものと解されるとも言う(p. 275)。このように従来は『法華經』諸品の成立年代の相違を示すものと考えられてき

た種々の矛盾した記述に関して、氏は、経の作者にとって整合性はあえて考慮に働かないことであり、「要するに諸品の教説の積み重ねによって、全体として統一的思想を表現するというのが『法華経』の立場であると考えられる」と述べる (p. 321)。

さらに普通は最も遅れて成立したとされる最後の六品(第三類)も先の諸品と同時の編纂と考え、「これら六品は、第二十品までの『法華経』(提婆品を除く)に對し、その「付録」の部分に当たるものとして作成されたものであり、それは、二十品の『法華経』に付して、経の読者の立場に応じて六品のうちどれか一品を選んでこれに受持読誦せしめるという目的の下に作成されたに違いない」と推定する (p. 186)。このような勝呂氏の論述からわれわれは、法華経の諸品の有機的な関連性を教えられ、經典全体の意図を示唆される。ただ氏の言われるように、法華経の作者にとって整合性はあえて考慮に働かないことであったと言いつてよいかどうかは、筆者にはいささか気になる点である。そのような考え方が氏の論攻に一貫性と明晰さをもたらしている長所であることは言うまでもないが、その反面、下田氏の論攻に見られるような「社会背景研究と思想研究の接点」について

の考察をやや希薄なものとした原因となっているようにも思われる。

以上、両氏の經典成立史に関する考察を見てきた。下田氏が経の階層の相違をその制作者の違いに求め、勝呂氏が編纂者の関心事の推移あるいは経の寓意の違いに求めておられることが、両氏の見解の根本的な相違点であるように思われる。しかしその相違にも関わらず、筆者は両書から經典の成立過程について考えるための様々な示唆や、經典研究の方法について思いを巡らせる貴重な機会を与えられたことである。(一九九八年九月十二日)

Bareau, A. "La construction et la culte des stupa d'après *Vinayapitaka*," *BEFEO*, #50, 1962, pp. 229-274.

"La composition et les étapes de la formation progressive du *Mahāparinirvāṇasūtra* ancien," *BEFEO*, # 66, 1979, pp. 45-103.

Gombrich, R. F. "Recovering the Buddha's Message", *Earliest Buddhism and Mahāyāna*, by Ruegg, D. S. and Schmithausen, L. #2, 1990, pp. 1-23.

MacQueen, G. "Inspired Speech in Early Mahāyāna Buddhism 1," *Religion*, # 11, 1981, pp. 303-319; *ibid.* 2, *Religion*, #12, 1982, pp. 49-65.

Przyjalski, J. *Le concile de Rajagrha: introduction à l'histoire des canons des cmones et des settes bouddhiques*, Paris, 1926-28.

Schopen, G. "The Phrase *sa prthivīpradeśas caityabhūto Bhavet* in the *Vajracchedika*: Notes on the Cult of the Book in Mahayana," *IJL*, # 17, 1975, pp. 147-181.

"Mahayana in Indian Inscriptions," *IJL*, # 21, 1979, pp. 1-19.

"Two problems in the History of Buddhism: The layman / monk distinction and the doctrine of the transference of merits," *AIJ*, #10, 1985, p. 9-47.

横超慧日 『涅槃經』一九八六年

勝呂信靜 『法華經の成立と思想』(一九九三年三月五日、大東出版社、A5判、四二六十四頁、一一、〇〇〇円)

下田正弘 『涅槃經の研究 大乘仏典の研究方法試論』(一九九七年二月二十五日、春秋社、菊判、四五三三二頁、七十三一三三二一四二頁、二九、八七〇円)